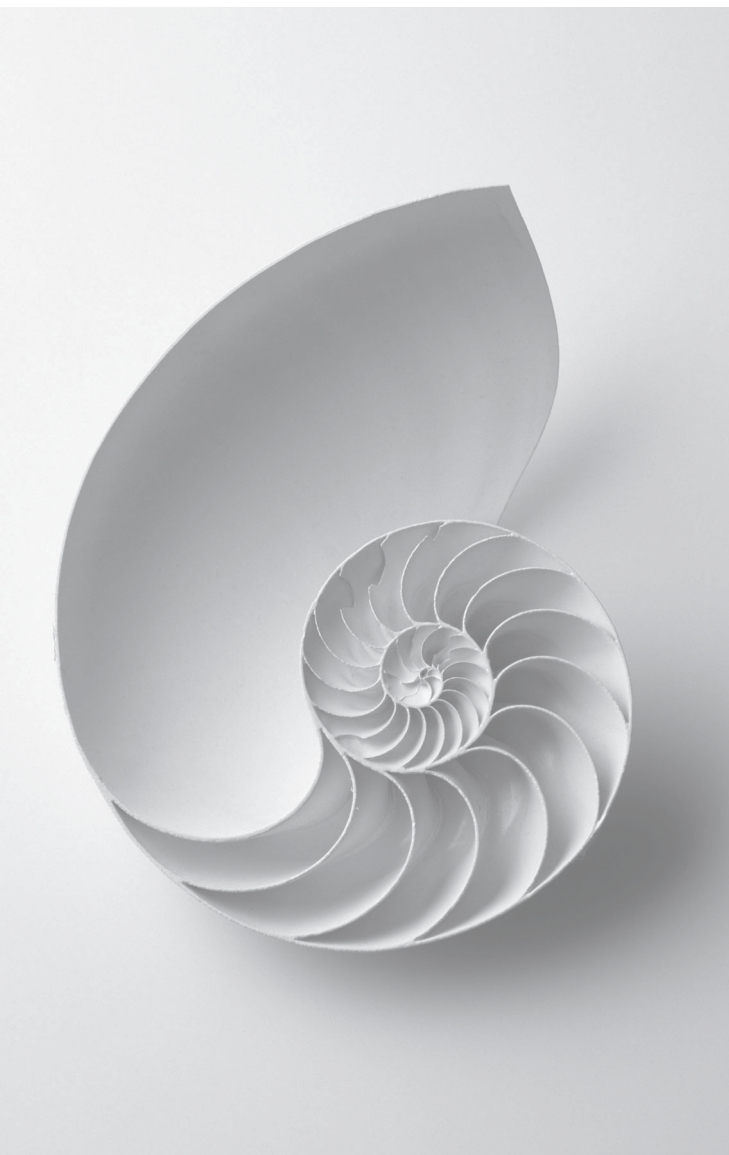


第19回

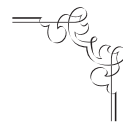
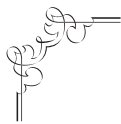
文窓賞優秀作品集



2025年10月発行

文窓会

神戸大学文学部同窓会



第19回 文窓賞 学生レポートコンクール 入賞作品

優秀賞

「逆張りの終着点」

有川 悠真（社会学 4回生）

佳 作

「2025年1月17日の日記」

熊谷 孝太（社会学 2回生）

佳 作

「記憶の歩き方」

村上 陽向（社会動態 M1）

佳 作

「『ガクチカ』をこえて」

末廣 晃（地理学 3回生）

新人賞

「ごっこ遊び」

日下部 友基（1回生）

新人賞

「私と言葉と人と」

筒井 はな（1回生）

◎ 選考会 2025年7月28日

◎ 応募総数 12作品

◎ 選考委員

白鳥義彦 研究科長（社会学 教授）

中畑寛之 副研究科長（フランス文学 教授）

佐藤 昇 副研究科長（西洋史学 教授）

武藤美也子 吉田浩次 廣野幸夫 三宅征彦 中川伸子

市澤 哲 津田 薫 梅村麦生 成田千紘 西川京子（選考委員長）



優秀賞

逆張りの終着点

ありかわ ゆうま
有川 悠真（社会学専修4年）

私は高校生の時、なんとなく法学部を志望していた。理由は何となくカッコいいから、成り行きで弁護士になれたらお金を稼げそうだから、そんなところだ。高校3年生に差し掛かったところ、自分の将来を想像してみると、法律に全く興味は無かったために六法全書を片手に持ちながら胸元に弁護士バッジを光らせて背筋をピンと伸ばしている自分が全く想像できなかった。そこで進路を再考してみたものの、どうも自分が入りたい学部がピンとこない。友達に進路を聞いてみたところ、自分と同じような悩みを抱えている友達はみんな経済学部へ進学するという。専門性が低そうだから、社会で有用なスキルが学べそうだから、モテそうだから、理由は様々だ。

「カチッ！」

何かのスイッチが入る音がした。私が持ち合わせる天性の「逆張り癖」の発動だ。私は人生の岐路に立った際にどうしても周囲とは迎合しない頑なな姿勢を見せてしまい、逆張った行動をしてしまう性格を持ち合わせているのだ。この進路決定の瞬間にも私の逆張りスイッチがONになってしまった。経済学部に行ってたまるか、と特に恨みもないのに経済学部を仮想敵として認定した。とはいえ、法学には興味が無い、英語なんて大の苦手、理系なんてもってのほか、学部選びは難航を極めてしまい当時の私は頭を抱えながらとりあえず受験勉強を機械的

にこなしていた。

悩める私のもとに突然蜘蛛の糸のように降ってきた選択肢、それが文学部だった。想像していた文学部は古い書物を読み漁り、海外文学をああでもないこうでもないと考察するステレオタイプ的なものだったが、たまたま家にあった神戸大学文学部のパンフレットを見ると、なにやら多くの学問が学べるらしい。文学、哲学、言語学、社会学、文学部とは少し遠い存在だと思っていた心理学まで学べるとの記載に少しワクワクした。たまたま国語が少し得意だったので入試も突破できそうで、周りに志望している人も少ないから逆張りも大成功。そんな思いで特に志もなく逆張り癖の結果としてこの学部を受験した。動機は人よりも少し軽い進路決定ではあったものの、きちんと努力はしたし、合格を知った瞬間には人生で初めて嬉し涙を流した。無事に始めることのできた大学生活だが、そのスタートダッシュはお世辞にも良いといえるものではなかった。

大学に入ったら何かサークルに入りたいという100人大学生がいたら98人は持っているであろう漠然とした願望があった。充実している大学生といえば、やはりサークルの仲間たちと交友関係を築いている様が思い浮かぶ。逆張り癖がある私といえどもそういう大学生活を送てみたいと考えていた。いざ、意気込んで様々なサークルに見学に行ってみるもののどれも自分にとってしっくりこない。高校までのコミュ

ニティとは雰囲気異なっていて、言語化はできない（今思えば、おそらく私は時間をかけて交友関係を築いていくことに慣れていなかったため、大学のインカレサークルのような立場も年齢も異なる人といきなり大量のコミュニケーションを取らなければならない場に慣れていなかっただけ）ものの自分にはどこのサークルもあまり合っていない気がして、結局自分が入りたいサークルが決め切れずにいた。

「カチッ！」

まただ。進路決定の際の逆張り癖はいわば自分にとっては「攻めの」逆張り癖だった。ただ、この時に発動した逆張り癖は紛れもない「逃げの」逆張り癖だった。自分が馴染めずに苦労していたのを転化させてサークルという制度そのものを心の中で否定していた。ちょうど大学1年生の夏が始まるころ、私はサークルを心のどこかで冷笑してしまっていた。今となっては恥ずかしい話だが、そうもしないと自分自身を否定してしまうことになってしまいそうで、逃げるための手段として逆張りをしてしまっていた。もちろんその逆張りが恥ずかしいという自覚は持っている。私は自分を俯瞰することは元来得意なので、自分が逆張りをしている瞬間を俯瞰で捉えることができるのだが、この逆張りに関しては俯瞰で把握した自分自身を見て見ぬふりしてしまった。

そんな中、私は友人伝いに「ハンドボールサークルを新しく作ろうとしている人がいるらしい」という話を聞いた。私は高校3年間ハンドボール部に所属しており、ほぼ毎日練習に勤しんでいた。メンバーの1人1人が全員強いというチームではなかったが、それぞれのメンバーの役割がはっきりした良いチームだった。高校3年生時には地域の中ではそこそこの強豪

校くらいの立ち位置となり、最後の大会に向けて必死に練習を積み重ねていたものの、学校の教職員がコロナウイルス感染症に罹患した影響で私たちの最後の大会は不戦敗となってしまったのだ。当然私はハンドボールに対する未練はあったが、当時の神戸大学にはハンドボールのサークルは存在しておらず体育会ハンドボール部だけが存在していた。大学の部活で活躍できるほどハンドボールが上手くないという自覚はあったし、なにより通学に往復3時間かかる大学生活で部活動をする時間の余裕もなかったために体育会に入るという選択肢はなかったので、大学でハンドボールを続けるという選択肢が無かった私にとってこのハンドボールサークル新設の話は久しぶりに私の心を大きく動かすものだった。既存のサークルに入るよりも自分が高校生活の中で未練を抱いていたハンドボールの新しいサークルを仲間と一緒に創り上げて自分の爪痕を残すことによって私の逆張りも何か結果を残せるかもしれないと考え、すぐに連絡を取り私もハンドボールサークルの新規立ち上げのメンバーに加わることができた。この瞬間に私の「逃げの」逆張りは「攻めの」逆張りに進化したのだ。かなり前のめりに参加したので、立ち上げメンバーの1人からは当時のことを振り返って「やばいやつだと思った」と今でもよく言われている。積極的に新入生歓迎のための企画をしたり、SNS運営をしたり、自分にできることはとりあえず挑戦してみた。ハンドボールをしたい、皆で作ったサークルをより大きいものにしたい、そういった思いはもちろんあったが私はどちらかというと自分の逆張った行動が正解だったと証明するために活動に力を入れていたのだと考える。サークル活動を否定した自分自身を認めるために、自分の力で自分達のサークルを大きくすることによって過去の自分の選択を正しいものにしたかったのだ。結果として私はこの選択に後悔はしていない。

サークルは会員数70名を超える規模にまで成長し（幽霊会員が増えてきているのが最近の悩みではあるが）、ともにサークルを成長させてきたメンバーは自分にとってはかけがえのない友人となった。あの時の逆張りがサークル運営の成功という結果として実を結ぶとは考えてもいなかった。

「逆張りオタク」というインターネット用語からも読み取れるように、どちらかというと世間で流行っているものを積極的に否定しているひねくれた人を表す言葉として世間に浸透している。言うなれば私の「逃げの」逆張りはこの文脈における逆張りとは何ら変わりはない。サークルという大学生の潮流を頭ごなしに否定して、自分が馴染めないだけなのにも関わらず、サークルというものの価値を認めないという極めて厄介な考え方だったと今となって思う。だが、そもそも「逆張り」とはもともと証券に関する用語で「相場の流れに逆らって株を売買する」という意味を持っているらしい。これはもちろん失敗した際には大きなリスクを伴うのだが、仮に成功した際には大きな利益を狙うことができる手法なのだ。私は進路決定、大学生活において逆張りをしつつも自分にとって最善な結果となるための努力は惜しなかった。自分が決めた道を正解にするために失敗のリスクを背負いながらも無我夢中で取り組む行動を伴った逆張りによって自分自身を前に進めることができたのだと考える。自分の悪癖により「逃げ」をしてしまっても、「攻め」に転換することができたのが、私の大学生活が黒歴史になることなく胸を張ることができるものになった1番の要因なのだと考える。逆張りも案外悪くない。私は声高々にしてそう言いたい。重要なのは逆張った後に自分でレールを敷いてそのレールを自信を持って進むことが大事なのだと思う。少し遠回りをしてしまったが、それなりに

形になった大学生活だ。今となっては少しも後悔はしていない。もう一度大学に入学したとしても同じような大学生活を送りたいと考えている（とはいったが、下宿はしておくべきだったかもしれない。あまりに往復3時間の大学生活はもうこりごりだ）。

この先の人生、相も変わらずまた「逆張り癖」が出てしまうかもしれない。私は自分のこの癖を悪いものだとは思っていない。真っ向から向き合って自分なりの方法で自分が選んだ道を正解にしようと思う。ついこの間、無事に就職活動が終了し、希望していた会社への入社が決定したため来春からは晴れて社会人生活がスタートする。

「カチッ！」

また何かのスイッチが入る音がしそうだ。

佳 作

2025 年 1 月 17 日の日記

くまがい こうた
熊谷 孝太（社会学専修 2 年）

まだ黒い空を切り裂くように開いた自動ドアは、容赦なく冷たい風を顔に浴びせてくる。

朝 5 時 30 分をまわる三宮はいつも気にならない街灯がやけに眩しく感じられる。ひとはほとんどいない。その街をわたしは走る。鼓動のはやまりを体感しながら、5 分走ったところできょうはじめてひとの影を見る。そこからだいぶひとが見え、東遊園地に向かう波に乗る。「出るときはそんな感じなかったのにやっぱさむいね」と後ろで話すひとの声がやけに鮮明に聞こえる。

わたしが取材する「阪神淡路大震災 1.17 のつどい」が行われる東遊園地に着いたのは 5 時 40 分で、ひとで溢れていた。急いで腕章をつけ、場内をまわる。カメラを構える。

「5 時 45 分 30 秒」を伝える時報。秒針の音。響く。40 秒。50 秒。一秒一秒待って欲しくない。はやい。刻々。黙祷。

カメラを構える。それぞれ目を閉じている。そのようすをわたしは切り取る。数枚押さえて目を閉じる。風の音が聞こえてくる静けさに包まれている。

静けさがゆるむ。それは紛れもなく一分が経ったということで、その一分の重さを考える。

「中学生が来てたんだよね、制服で。」と三ノ宮駅に向かいながら先輩は教えてくれた。「学校の授業で震災について勉強したらしくて。親の話は聞いてたって言ってたけど初めて来たらしい。たぶんこのまま学校にいくんだろうなあ。」自分を思い返してみる。追悼行事はあったけれど、コロナで中 3 のときは全校参加というものは無くなった。家での黙祷にどこかためらいがあったような記憶がある。高 1 のときは

なんの心境の変化なのかひとり部屋で黙祷した。

六甲道に部員が集まる。それぞれの場所で午前 5 時 46 分を切り取った。それをあつめる。神戸大に発災当時通っていた学生の遺族が下宿跡地で祈りをささげる。下宿先近くの公園に集まるひと。存在感を放つ六甲台第 1 キャンパスの慰霊碑。こんなにもたくさんのひとが、5 時 46 分の祈りをともにしている。

東遊園地のようすを文字でも切り取る。ネットニュースは「よりそう 1.17」の灯籠を全景が見えるようにとらえた写真をたくさん流す。その灯籠に火を灯すひとの数を思う。実行委員会は「よりそう」ということばについて「震災から 30 年となり経験した人が減っている中でも、被災地や被災者のことを忘れず心の中で寄り添い続けることや、東日本大震災や能登半島地震などの被災地に寄り添い、力を合わせて一歩一歩進んでいきたいという思いが込められている」としている。こころの中で寄り添う。

記事を仕上げて家に帰る道中で「おむすび」を思い出す。「おむすび」は NHK 連続テレビ小説で、神戸も舞台。主人公は六歳のころに阪神淡路大震災を経験する。秋に神戸大でこのドラマの制作統括と出演俳優によるトークショーが行われた。「放送中に阪神淡路大震災から 30 年を迎えることを脚本家とも話していたんです。こういうタイトルはどうか、といわれたのがおむすび。実はおむすびには記念日があって、それは 1 月の 17 日だと。で、その……。被災された方がおむすびをいただいたという話があって。それを聞いた瞬間にもう覚悟、なんというか、ああこれはもうちゃんと伝

えるべきだというふうに当時思いました。」と涙ながらに語る制作統括のかたのようすが強く記憶に残っている。「もしかするとこれから伝えていくのは経験をしていない人間かもしれない。でもそれを伝えていくのはどういうことかをしっかりやっ払いこう。それがあつ種これらの宣言にもなるし、神戸の方にも伝えることを望んでいただけるのではないか。日本全国の人に自分ごととして考えてほしい。みんなに考えてほしい。」

「おむすび」を見逃し配信で見る。ちょうど東日本大震災が起きた2011年ごろの神戸のすがたを描いていて、冒頭から震災のことを取り上げていた。2012年の1月17日。実際の映像。先ほどまでいた東遊園地で神戸が祈るようす。そのあとすぐ、石巻から神戸に向けて祈るひとが映された。14時46分に神戸から東北へ黙禱が捧げられたことも伝えられた。

神戸に来てから、東北と神戸がつながっていることを感じるようになった。Xを見ていたら、夏に遊びに行った宮古駅で5時46分に黙禱が行われること。同じく朝ドラの「あまちゃん」で登場した三陸鉄道の「三陸・神戸絆号」が沿岸を走ること。そして神戸新聞の別刷りが特別配布されることが流れてきた。はじめて関西で過ごす3月11日にわたしは何を思うのだろう。

そんなことを考えては、眠気がきて、へんな姿勢で一時間ほど寝る。起きたらまた時間ぎりぎりで、急いで準備して神戸大に向かう。慰霊碑の前で行われる献花式取材する。

12時30分。黙禱。学長のあいさつ。遺族代表あいさつへと続く。「慰霊碑が関係者だけのものではなく、阪神大震災の記録として多くの方々の記憶に残り、様々な災害によるかなしい被害ができるだけ少なくなるような活動が、神戸大学を中心として発信され、さらに多くの防災の活動につながることを願ってやみません。」

来場された方に話を聞く。発災当時、神戸大に在学していたおじさんの話がつよく記憶に残った。東京に実家があるという。「震災のことを話すことに抵抗がある。わたしは大学で教鞭をとっているからそこではたくさん話すけれど、大学で話すにも発災から20年かかったし、プライベートとなるともっと話せない。通じるかこわい。娘にはもうすこしひとの機微がわかる年齢になったら話そうと思っているんだけど、それって何歳なんだろうね。」と困ったように笑っていた。

その姿を見て、自分の経験を思い出さないわけがなかった。いま神戸で生活を営んでいるけれど紛れもなく東北の人間。東北がすき。誇れるものは？と聞かれたらなにか言えるわけでもないけど、そこがすき。2011年3月11日。わたしは5歳で、ほぼ「おむすび」の主人公の被災当時の年齢。福島であの日わたしは生きていた。被災した、のだと思う。のだと思う、の感覚がわたしの中で消えない。

今、わたしにできること。みんなでやれば大きな力に。こだまでしょうか、いいえ、誰でも。車中泊のワンセグは映しつづける。車の中でなにもすることがなくて姉が一日に何度も交換日記を回していたこと。発災後にはじめて家に入って食べた夜ごはんは焼きそばで、家族で囲んだこと。トイレの水をまちがえて流してしまった。泣きそうになりながら謝ると家族はあきれて笑ってくれたこと。

こんなものがわたしに今も残り続けている記憶。原発でいまも住む地に戻れないひと、津波で愛するひとを失ったひととおなじように被災者になることに抵抗がある。あの日同じように生きていたひとはみんな被災者で、でも5歳のわたしの被害なんて映像を見てころを痛めることくらい。他のひともおなじように映像にころを痛めているだろう。

それでも東日本大震災は無かつたことにでき

ない事実であり、東北を話すときに通り過ぎてしまいたくない。すきだからこそ東北を離れる選択をしたわたしは、悩んでいた。阪神淡路大震災を知りたい。社会学で災害時のメディアのあり方についても考えたい。一方で、災害をネタのように扱いたくない。東北出身だもんね、震災大変だったでしょう、みたいなノリでわたしに話さないで。記憶はわたしにあるようでわたしにはないし、復興後の社会を担う若者、東北で被災した経験があるから神戸で励んでいる、でなく、ただあの場であの日を生きていただけ。わたしはいまここで生きるひとに興味があって、自分の生き方を考えたいだけ。遺族の方に行っているインタビューも答える方が減っているようだ。もう被災から防災へと視点を変えたほうがよいのではないかと思うこともあった。それでも被災当時のことを聞くことも大切だということも、話すことで整理されることもあると知っている。でも話を聞くと、どこまで相手に踏み込んでいいのだろうかと思う。かわいそうに、という見方をわたしはしたくない。

「わたしは東北の出身です。でも東日本大震災の話は友人にできません。親しくならないうとできない。決して軽い話ではないし、だからこそ話したときにわかってもらえなかったら、これまで親しくしていたひとと自分との間に自分で深い溝を作ってしまうようでとても怖い。でもそれで話さないということを選んだら、それは語り継ごうという意志からは逆行していますよね。」と、わたしは気づいたら悩みを口にしていた。このおじさんは通じるものがあると直感していた。

「わかる～」と言ってくださった。そのとき、陽に照らされた「わかる～」の顔はほんとうに「わかる～」と思っているひとにしか出ない顔で、力が抜けた。「だからやっぱり語るって名目がないと難しいよ。その肩書をひとに与えるのが地元メディアだったりの力なんだよね。わ

たしもだけどプライベートで語ろうとがんばりすぎなくていいよ。無理しない。それを公でカバーしていくことが大事なんじゃないかな。」ぐさりと刺さった。靄が晴れていくようで、感動した。語り手が語りたいと思っていることを自然の状態で語ることができるようにしたい。それはうまく語り手になりたいけどなれないわたしにこそできることなのかもしれない。

取材のあと、OBからおじさんと話していた内容を聞かれた。要約して伝えと、長々聞いていた分すぐに記事に起こさないとね、神戸大出身なら当時の写真とかも準備して記事にしないと、と言われる。でもわたしが得るものが大きすぎて、整理する時間が欲しかったし、この追悼の流れで記事にした場合、震災のことね、で意識が止まってしまうのがいやだ。それに先ほどの話は記事にされようとして出たものではないことも知っていて、このテーマを記事にできるならばもっと話を聞かねばならないと思った。それが顔に出ていた。迷ってるんじゃないよ、とだけ言われ、普段ならば、何も聞いていないのにえらそうに、と怒るところだが、きょうは、ああこのひとにはこの感覚を伝えるのはまだはやいな、と諦めた。

会議室に移動して記事を書く。献花式に来られた方のコメントをまとめ、号外をつくる。こみ上げるものがあると同時に、わたしはたくさん悩んだ。部員全員がパソコンに向かい、必死に打つ。はじめて自分が考えた見出しが褒められて、号外の上で踊っている。会議室での約5時間はあっという間に過ぎた。

そのあと打ち上げをする。みんなが働いたひとの顔をしていて、大学生ということも忘れそうになる。

帰り道。間もなく代替わりして編集長になる先輩といっしょになる。やさしくて、いい先輩。でもどこか自信がなさそうで、それがやさしさにもつながっているのだろうけど、きょうは明

らかに疲れているはずなのに「おれは全然なにもできていない。がんばってもない。ほんとうによくない。」と言っていた。「いや、がんばったから疲れているんでしょう。よく寝てくださいきょうは」と言ってはっとする。自分もどちらかといえば先輩とおなじタイプで、いつも自分はまだまだだ、がんばりが足りない、と思っていた。それなのに「がんばっているから疲れているんです」と言っている。

先輩と別れてひとりで歩く。電車に乗ればすぐなのだけど、きょうはなんだか歩きたい気分だった。でもひとりはずこし寂しくて、やはりこれは寒さのせいということにした。

佳 作

記憶の歩き方

むらかみ ひなた
村上 陽向（社会動態 M I）

四月。私は一篇の詩を地図として、東京は杉並区の住宅街を歩いた。

詩人・谷川俊太郎（1931-2024）の作品に「私の家への道順の推敲」（『定義』思潮社、1975年）というものがある。題にある通り、その詩には当時谷川が住んでいた自宅への道順が書かれている。地下鉄丸ノ内線の終点である荻窪の一つ手前、南阿佐ヶ谷駅からその道順案内は始まるのだが、結論から言ってしまうと、この案内では彼の家にたどり着くことはできない。杉並郵便局、杉並警察署、杉並区役所と具体的な建物を目印として、細かな方角の指定もある前半部はいいのだが、杉並税務署を過ぎたあたりから雲行きが怪しくなってくる。「その後はもう簡単だ」という言葉から始まる第三連で、「どこかそのあたりの狭隘な十字路の一つを曲り、他の一つ曲らなければいい」ときたⁱ。この詩を頼りに歩いた読者はみな、ここで途方に暮れ、知らない住宅群の中で立ち尽くすのである。もし幸運なことに十字路の選択を間違えなかったとしても、たどり着くのは近所の八百屋でしかなく、作品に記述がある通り八百屋、酒屋、菓子屋、歯科医院という調子で辿っていくと、いつの間にか読者は国電阿佐ヶ谷駅（現JR阿佐ヶ谷駅）にいる。そんな読者に対して語り手は「その駅からも当然、私の家へ徒歩で達することが可能だⁱⁱ」と告げ、この詩は終わる。そのようにして、この「道順の推敲」を頼りにやってきた人々は谷川が生まれ、暮らした街の中で彷徨うことになる。そして、私ももれなくその仲間入りを果たしたわけである。

もちろんそうなることはこの詩を初めて読んだ時からそのことはわかっていた。というのも、

本作品は以下のようなエピグラフから始まる。

「あ、栗鼠！」と叫んで、少女は思わず手にした扇子をとり落した。

〈私の家への道順の推敲〉よりⁱⁱⁱ

「あ、栗鼠」というのは間の読点を無視すれば「ありす」と読めるし（英訳では“Look, Al! Squirrel!”となっており、こちらにも同様の言葉遊びが見られる^{iv}）、このエピグラフの引用元を見てみると、この詩の題と全く同じものになっている。しかし本作品の中にこのような記述はエピグラフそのものを除いて一切なく、この引用元を探したとて、どうやってもたどり着けないのである。そういうわけで、このエピグラフが仄めかしているように、ウサギを追って不思議の国に迷い込む少女よろしく、詩を追ってやってきた人々が杉並の住宅地に迷い込むことは初めから決まっていたのだ。

そのことを了解したうえで、私は詩に書かれている通りに歩き、迷い、言うまでもなく谷川の自宅にたどり着くことはなかった（その近辺をくまなく歩き回ったり、インターネットで検索すれば見つけることもできたかもしれないが、それはしなかった）。しかし、そのことに対して落胆したり、怒りを覚えたりすることは（もちろん）なく、むしろ満ち足りていたと言ってよい。というのも、この詩を初めて読んだとき、私は存在しない記憶の中で、訪れたこともない地下鉄丸ノ内線の南阿佐ヶ谷駅を降り、歩き、迷い、やはり彼の家には到達しなかった。その時に想像した杉並の雰囲気と通ずるものを、実際に詩を頼りに歩いたときに感じたから

だ。この詩が発表されたのは1975年、すなわち今からちょうど50年前のことである。半世紀が経過し、作中に出てきた建物やお店の中にはもうなくなってしまうものもあった。それに、描写されていない部分においても谷川が少年期、青年期を過ごした頃の街並みとは大きく変わっていることだろう。しかしながら、作品の語り手が案内してくれたその道を辿ると、それが書かれた頃の街の面影が少なからず感じられるのである。それゆえに、私は目的地に辿り着かずとも満ち足りた気分になった。そうこうしている間に日が暮れてしまっていて、夕食どきの家々から美味しそうなにおいがしてくると、私もお腹が空いてしまい、軽食をとってから来た道を帰った。私を案内してくれた詩の語り手もまた、その住宅地のどこかで夕食を食べているような気さえした。

それからしばらくして、神戸に戻ってきた時、私は学部1年生の頃に授業で書いた発表原稿について考えていた。その時も杉並で行ったことと同じようなことをやっていて、作家の村上春樹(1949-)が書いた「神戸まで歩く」(『辺境・近境』、新潮社、1998年)という紀行文を実際に辿って歩き、そこで得た気づきを書くというものだった。西宮から三宮まで、地図で見るとおよそ15キロメートルの距離を、村上が記述していた箇所を訪れながらほぼ一日かけて歩いた。彼が西宮から神戸まで歩いたのは、1997年の5月、すなわち阪神・淡路大震災からまだ2年と少ししか経過していない時だった。それもあって、「神戸まで歩く」の中には、震災によって失われてしまったものと、震災からの復興によって失われてしまったものについての記述が散見される。復興によって失われてしまったもの。それはすなわち、神戸や芦屋で育った典型的な「阪神間少年」であった村上が暮らした「神戸」あるいは「芦屋」である(と学部1年であった私は考えていた)。しかし、彼が歩

いた道を辿っても、私にはその「神戸」「芦屋」を理解することはあまりできなかった。私は震災を知らない。それに、物心がつく頃には街もかなり復興が進んでいて、小学校の授業で見たような震災の光景や傷跡は、目を凝らして街を見なければ、ほとんど見えなかった。だから、私は復興の後の神戸・芦屋しか知らない。彼の「神戸」「芦屋」はもはや彼の記憶の中にしかなく、それを何も損なうことなく理解することは、私にはできない。杉並を歩いた時、詩に書かれている「杉並」と通ずる部分も少なからず感じられた、と私は考えたが、それでもやはり損なわれてしまっているものもあるのだろう。だとしたら、私が暮らす神戸の街も、やがては私の記憶の中にしかない「神戸」になってしまうのだろう。もしそうなった時、私がその中の一部分を忘れてしまったとしたら、その「神戸」はもうどこにも存在しなくなってしまうのだろうか。それってものすごく寂しいことだ。

かなり寄り道、回り道をしてしまったような気もするが、私がこの文章の主題に据えるのは「記憶を歩くこと、そして記すこと」のススメである。もちろんそれは自分自身に対してのススメでもある。ある人がそれを読んでかつての神戸に想いを馳せるようなことがあればそれは喜ばしいことこの上ないが、まずは私が「神戸」を忘れてしまわないために。

私がかつて暮らした生田川沿いの地域は、昔に比べてかなり人が少なくなった。人の賑わう神戸のメリケンパークから六甲に向かって歩くと、生田川の下流付近にある集合住宅の群れにぶつかる。かつては飲食店をはじめとする様々な店舗が立ち並び、各集合住宅の共用部には子どもたちの声が響いていたが、今となっては上がっているシャッターのほうが多く、夜になっても明かりがついていない家も多い。三宮・ミント神戸前のロータリーを中心とした再開発や、須磨水族館改め須磨シーワールドのオープ

ン、HAT 神戸近辺のファミリーマンションや新設小学校の開校などが起こる一方で、生田川周辺のようにかつての活気を失いつつある地域もある。もちろんそのような地域に活気を再び与えるようなことができれば良いのかもしれないが、まずはせめてそのような場所の記憶を失ってしまわないために、そこを、あるいはその場所の記憶を歩き、そして記してみようと思う。今後そのようにして記した文章は、誰に見せるでもなく、もしかすると私自身書いたことを忘れてしまうかもしれないが、その文章は静かに「神戸」の記憶をそこにしっかりと繋ぎ止めておいてくれる。海港都市の隅で出港を待つ小さな船と繋がれた、寡黙なボラードのように。

——布引の滝の流れを耳にしながら、新神戸駅の東側に出て、生田川沿いを南に下ると、やがて味のある中華料理屋の看板を目にする。そこを左に曲がると猫がいる小さな喫茶店があり、タヌキが迎える大安亭市場の入り口にたどり着く。中華料理屋で左に曲がらず南下していくと、大きな交差点に出る。右手には雑居ビルの一階にファミレスがあり、平日の昼間でも子供連れの親で賑わっている。阪神高速の生田川出入り口を横目に長い横断歩道を渡ると、集合住宅が立ち並んでいて、そのうちの一棟に目をやると、ちょうど真ん中あたりの一室にあたかな明かりが灯っていて、夜になってもはしゃいでいる子どもたちの声が聞こえてくる。その声を聞くと、自然と背筋が伸びる。

ⁱ 谷川俊太郎「私の家への道順の推敲」『CD-ROM 谷川俊太郎全詩集』、岩波書店、2000 年（初出は『定義』、新潮社、1975 年）

ⁱⁱ 同上

ⁱⁱⁱ 同上

^{iv} 谷川俊太郎著、W.I. エリオット・川村和夫訳「私の家への道順の推敲」『～これまでの詩・これからの詩～14 定義〔電子書籍版〕』、岩波書店、2016 年

佳 作

「ガクチカ」をこえて

すえひろ こう
末 廣 晃（地理学専修3年）

「われわれ大学生は、一時的に社会的な義務の多くを免除された存在だが、卒業が近づくにつれて、自分がこの後どのように生きていくかを考えざるを得なくなる。エリクソンの発達段階を引き合いに出すまでもなく、青年期には自己について、否応なしに考えざるをえないというのは一般に認められた考えだ。しかし本稿の目的は、学生が自己に向き合わされるやり方が、非常に特異かつ狭量なものになってきているのではないかと示唆することである。端的に言えば、学生が自己を顧みるやり方は、ますます就職活動という目的に沿って編成されるようになっていく。表1は数冊の就活対策の書籍¹の章構成であるが、どの本にも必ず「自己分析」が含まれる。就職活動を始めた学生は、自分の来し方行く末をじっくりと一ただし特異なやり方で一考えるように仕向けられるのだ。

近代以降、人々は、自分が何者なのかを問い直さざるを得なくなった。イギリスの社会学者アンソニー・ギデンズは、このことを近代の「脱埋め込み」作用と呼ぶ。前近代においては、人々の生計の立て方、結婚相手、生活の水準などは、おおむね生まれついた身分と環境とによって規定され、人生の分岐点は多くなかった。どのように振る舞い、何を信じ何を嫌悪するかはおおよそ決まっており、それらについて深く省みることはまれだった。ギデンズによれば、近代以

書名	『就活の教科書 これさえあれば。』
Part1	就職活動の流れを知ろう
Part2	まずは自己分析から始めよう
Part3	仕事・業界研究でキャリアビジョンを明確にしよう
Part4	相手に伝わるエントリーシートの作り方
Part5	インターンシップを有効に活用しよう
Part6	筆記試験&Webテストを突破しよう
Part7	就活マナーを身につけよう
Part8	集団面接・グループディスカッションを攻略しよう
Part9	個人面接で内定を勝ち取ろう
書名	『こう動く！就職活動オールガイド』
第1章	就職活動のイメージをつかもう
第2章	自己分析から就職活動を始める
第3章	情報の集め方と見分け方
第4章	エントリーシートと履歴書
第5章	会社説明会に参加しよう
第6章	筆記試験の準備をしよう
第7章	面接突破のテクニック
第8章	内定とその後の活動
書名	『内定獲得のメソッド 就職活動がまるごとわかる本』
Part1	就職活動の全体像を理解しよう
Part2	就活対策/基本編
	(vol.08 自己分析の基本を確認しよう vol.09 自己分析に実際に取り組もう)
Part3	就活対策/実践編
Part4	履歴書&ES対策編
Part5	面接対策編
Part6	就活リカバリー編

表1 主な就活総合対策書籍の章構成

降、伝統的な身分制の崩壊とともに、自分が従うルール・慣習・いかに生きるべきかといったことはより広い文脈に置き直されるようになった。人間は絶えず自分の信念と規範とを点検し、自己を再構成するようになった²。

¹ 竹内健登『2027年度版 就活の教科書 これさえあれば。』TAC出版, 2024; 高畠悠人『こう動く！就職活動オールガイド'27年度版』成美堂出版, 2025; 岡茂信『内定獲得のメソッド 就職活動がまるごと分かる本 2027年度版 いつ? どこで? なにをする?』マイナビ出版, 2025.

² ギデンズ, アンソニー (1993)『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏訳, 而立書房, 1993.

ギデンズは『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』においてさらに考察を進め、ギデンズが「ハイ・モダニティ」と呼ぶ後期近代社会において、自己とは自分自身で作り上げていくプロジェクトのようなものであるという考え方が、人々が自己について抱く考えの中で支配的になっていると論じた。実際、プロジェクトとしての自己という自己観が、「脱埋め込み化」のプロセスにおいて参照される自助マニュアル（日本でいう自己啓発本）のような知識の中に組み込まれていることをギデンズは指摘する³。自己はもはや自明なものではなく、自分は何者で何のために何をしているのかといったことを、自ら意味付け、物語として示さなければならなくなっているのだ。社会学者の牧野智和は「ありのままの自分」「自分らしく」「自分を信じて」といった音楽の歌詞や、就職活動における「自己分析」と「自己PR」に直面する中で、「そこかしこで『自己』と向き合おう、それを高めようとする語り」を目にし、実際にそうすることを促されるような状況を生きて、「このような状況は一体どのようなにして現れ、またそのなかで私たちはどのような『自己』であることを求められている」のか、という問いを抱き、研究を行った。牧野は『自己啓発の時代——自己の社会学的探求』⁴で、自己啓発書ベストセラー、就職用の自己分析マニュアル、女性向けライフスタイル誌、男性向けビジネス誌の分析を通してこの問いに取り組

んでいる⁵。

プロジェクトとしての自己、「物語的自己」という主張を前提として受け入れたうえで、私は本稿で、大学生が「履歴書としての自己の物語」を書き上げるために経験を取捨選択しているのではないかと論じる。経験の選択は、消費社会における消費者の振る舞いとも符合することも示唆される。本稿の分析は個人的な経験に頼らざるを得ず、考察は部分的なものに留まることを注記して、筆を進めよう。

ある事例から始めよう。昨年の夏、同じ学生向けアパートに住むが普段は親交のない学生と言葉を交わすことがあった。10分以上も続いた会話の中で、サークルなどの課外活動は何かやっているかと問われた。1年間所属していた運動部を4月にやめ、ボランティア団体のメンバーとして能登半島の被災地に通い始めた頃だった私は、その話を彼にした。彼から返ってきた最初の言葉は、「ボランティア？ガクチカ⁶（学生時代に力を入れたこと）のためとか？」であった。ある大手就職情報サイトの記事の情報では、「ガクチカ」は「就職用語」ランキングの上位に過去7年間、居座っている（2019年、2024年、2025年は1位、2020-2023年は2位）⁷。

また別の事例では、「ドイツに留学に行きたい」と言った後輩に「いいんじゃない？就活にも使えるし」と返した大学院生がいた。留学が「キャリア形成」を目的とするものである、と

³ ギデンズ、アンソニー『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳、ハーベスト社、2005。（文庫版『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳、ちくま学芸文庫、2021。本稿では文庫版を使用。）

⁴ 牧野智和『自己啓発の時代——自己の社会学的探求』勁草書房、2012。

⁵ 牧野智和『社会は私をどうかたちづくるのか』ちくまプリマー新書、2025。

⁶ 大手就職情報サイトの説明によれば、「学生時代に力を入れたこと」あるいは「学生時代に頑張ったこと」の略で、就職活動中の学生の間でよく使われる造語のひとつ。選考の過程で、志望動機や自己PRと並んで問われる頻度が高いことから、就活用語として定着している。（「用語集 就活関連キーワード ガクチカ」マイナビキャリアリサーチ Lab, <https://career-research.mynavi.jp/glossary/jobhunting-page07/>, 2025年7月20日閲覧。）

いう主張は、文部科学省の施策に端的に表れている。同省が推進する「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラム【大学生等対象】～」の要綱には、冒頭に「本制度は、将来的に、「自ら社会に変革を起こしていくグローバルリーダー」となり、日本の未来を創る人材の育成を社会全体で強力に推進することを目指します。」⁸（下線は本文ママ）と記されている。「自ら社会に変革を起こしていくグローバルリーダー」とは、「産業界を中心に社会で求められる人材」（傍点筆者）であり、「新たな課題発見・解決や、新たな技術の獲得・能力の向上等に意欲的にチャレンジし、社会にイノベーションを起こしていく人材」（傍点筆者）であるのだという。

2つの事例が示唆するのは次のようなことだ。すなわち、学生を潜在的な雇用対象として捉える強力な社会的まなざしが存在し、そのまなざしのもとで学生は自己を認識し、ストーリー化して語ることが求められる。別の言い方をすれば、学生が学生時代の自分の「学び」を想像する方法は、それがいかに自分の雇用につながるか、という点に近年ますます狭められてきている。

現代資本主義社会の鋭い批判者である、イギリスの社会学者ジグムント・バウマンは、

『*Consuming Life*』⁹（消費する生／生を消費する）のイントロダクションにおいて、消費社会の消費者像を描き出す。バウマン曰く、彼女らは、^{プロモーター}商品の売り込み人であると同時に彼女らが売り込む商品である。彼女彼女らは取引の品であると同時にマーケティング事業者であり、品物であると同時に旅するセールスパーソンである（そして付け加えるならば、教職や研究基金に応募したことがある学者は誰でも、彼女や彼の経験した困難な状況を簡単に認めるだろう）。統計表の作成者によっていかなる層に分類されようと¹⁰、彼女ら彼らはすべて、^{マーケット}市場という名で知られる、同じ社会空間の中に住んでいる。彼女彼女らの関心事が政府のアーキビストや調査に熱心なジャーナリストに何の範疇として分類されようと、その全員が（選択してまたは必要に駆られて、あるいは最もよくあるのは両方の理由で）従事している活動は、マーケティングである。社会的な賞を手にすることを認められるために合格しなければならないテストは、自身を商品として作り直すことを彼らに要求する。すなわち、注目を集め、需要と顧客を引き付けることができる製品として。

（Bauman, 2001: 6 の筆者による和訳。斜体字は原文ママ）

バウマンは生産社会（重工業と巨大な軍隊によって特徴づけられるような）から消費社会へ

⁷ 「学生就職モニター調査」におけるアンケート調査の質問項目「あなたの周りで流行った「就活用語」は？」の回答に基づくランキング。

（片山久也「就活用語とは？【2025 年卒～2018 年卒】の就活用語の流行りと推移を紹介！」2024-6-10. マイナビキャリアリサーチ Lab, https://career-research.mynavi.jp/column/20240610_77464/, 2025 年 7 月 20 日閲覧。）

⁸ 「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラム【大学生等対象】～2024 年度（第 16 期）派遣留学生募集要項」文部科学省官民協働海外留学創出プロジェクト・独立行政法人日本学生支援機構グローバル人材育成部，2023 年 10 月。

⁹ Bauman, Z. *Consuming Life*, Polity Press, 2001.

¹⁰ 引用部分の前の箇所では、バウマンは、注目と承認を集めるために SNS サイト上に熱心に自分の情報を投稿するティーンエイジャーたち、コールセンターのシステムによって、見込まれる利益の多寡に基づいて対応の早さを決められる顧客たち、イギリス政府のポイント制の導入によって、金を稼ぐスキルをもっていることを証明しなければなくなった移民たちの記述から論を始めている。

の移行を主張する。生産社会の成員の半分である男性がまず第一に生産者かつ兵士として（そしてもう半分である女性は奉仕の提供者として）求められたのに対し、消費社会の成員はみな等しく消費者としての召命（vocation）―すなわち市場が提供する商品を選んで買うこと―に従うことが求められる。生産社会は身体の欠損者を排除したが、消費社会から排除されるのは「欠陥のある消費者（flawed consumer）」である。社会的に無価値であると見なされないようにするために、「消費は個人の「社会生活」と尊厳にとって重要なあらゆるものへの投資なのである」。「消費社会の成員はそれ自身消費者商品（commodity consumer）であり」、消費者であることによってはじめて社会の一員として認められる。「売り物になる商品になり、そのような商品であり続けることが、消費者の諸関心のうちで最も影響の強いものである」¹¹。

かくして、「消費社会の個々人の成員は、まずなによりも、ホモ・エリジェンズ〔*homo eligens* ラテン語で「選ぶ人間」の意〕として定義される」。以上のバウマンの主張が正しいとすれば、学生時代の経験は切り詰められていくだろう。学生は物語になるような学習や課外活動を選択して行う。学習や活動といった経験は、履歴書に書けるストーリーの創作に役立つような商品と捉えられ、「学生時代の貴重な時間」というコストを払って手に入れるものとして解釈される。費用対効果、「コストパフォーマンス」が重視され、より手間のかからない商品としての経験が求められるのである。反対に、物語として書きにくい学習・活動は商品としては適切でない。自己の物語を揺らがせる可能性

のある学習・活動は「割に合わない」として切り捨てられるようになる。

能登半島には月に一度ほどのペースで通っている。1人ではなく、団体の仲間が一緒だ。水害で被害を受けた畑の復活のために土を運び出すこともあれば、お茶とお菓子を用意したカフェ企画のお手伝いをすることもあった。顔なじみになった住民の方々はボランティアが来ると笑顔で迎えてくださるが、震災から1年半ほど経つ今、仮設住宅の後の住まいをどうするか考え始める時期に来ている。私たち学生は果たして被災地に何かを与えることができているのだろうか。ボランティア活動を消費してはいないか。答えのない問いを通して、自己と、他者と、向き合い続けよう。

参考文献

- ギデンズ、アンソニー（1993）『近代とはいかなる時代か？―モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房、1993。
- ギデンズ、アンソニー『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳、ハーベスト社、2005。（文庫版『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳、ちくま学芸文庫、2021。本稿では文庫版を使用。）
- 牧野智和『自己啓発の時代——自己の社会学的探求』勁草書房、2012。
- 牧野智和『社会は私をどうかたちづくるのか』ちくまプリマー新書、2025。
- Bauman, Z. *Consuming Life*, Polity Press, 2001.

¹¹ Bauman, 2001: 54-61.

新人賞

ごっこ遊び

くさかべ ともき
日下部 友基（文学部Ⅰ回生）

祈るのが得意だったら小説家なんて目指さなかった。祈るのが苦手だったために、私は文学部に入ってしまった。

私の両親は牧師だ。両親ばかりではない。姉も従兄弟も叔父も祖父も曾祖父も牧師である。私は典型的な牧師家庭の末っ子として生まれ育った。物心ついたときから私の周りにはキリスト教があり、それを特に疑うことは無かったが、一つだけ苦手なことがあった。祈ることだ。信仰に祈りはつきものである。夜ご飯の前に祈る。病気をすると祈る。日曜日、礼拝の説教はこの言葉で締められる。「ひとつ、お祈りをいたします。」

この言葉のたびに緊張する。ああ、祈らなければ。失敗の予感を感じながらも眼をつむる。父が訥々と祈り始めるが、声は音として耳に入るだけで、言葉にならない。終わっていない宿題とか、同級生に投げかけてしまった棘のある言葉を思い出してしまう。これはダメだとさらに強く眼をつむるが、黄緑と紫のアメーバがまぶたを漂うだけで、神様らしき人はついぞ現れなかった。

祈り方が分からない。正解なんてないのだろうけど、私の祈りが間違っていることだけは分かる。祈りの時間はいつだって苦しかった。きっと私には才能が無いのだと次第に思うようになった。そう思い込むことしか出来なかった。見えない何かを信じる才能。心の中で弱みを打ち明ける強かさ。そういったものが私には無いのだ。神を信じない人は今時たくさん居るが、私は生まれの境遇のために後ろめたさがあった。

洗礼を受けるつもりは無い、と母に告げると母は泣いた。ずるい、と思った。私だって泣きたかった。額縁の中で十字架につけられたキリストが、私をなじっているようだ。「私を信じていないおまえを、私は愛さない」と。二人の姉は神からの愛を確信して神学の道に進んだ。二人を恨みがましく思う自分が、あいつらは才能があっただけだと言い聞かせる自分が、ひどくさもしい人間に思えて一等悲しくなった。

それでも私は、見えない何かを信じてみたいと思った。ひたむきに信じることへの憧れが芽生え始めた。私だって、頑張れば何かしら信じられるのではないか。

牧師への道が無くなった私には文学しか無かった。実家の教会には幼稚園が付属していたので、数え切れないほどの絵本が周りにあった。小さい頃からそれを読みあさっているうちに、気づけば私の夢は絵本作家に、少し成長してからは小説家になった。ほんやりとした憧れがはじめにあってだけで、特に明確な理由は無い。強いて挙げるなら、私が夢を語ると、大人たちが私を褒めたから。私は得意になって夢を吹聴してまわった。得意になっているうちに引き時を見失ってしまった。ケーキ屋さんになったあの子は公務員志望になり、サッカー選手になると語ったあの子も地元の工務店に就職していった。成長して現実が見えてくるとみんな自分の夢を諦めて新しい夢を抱く。手放した夢の数が成長のトロフィーになる。同級生が昔の夢を懐かしむ中で、私だけは夢を諦めることが出来ず必死に守り続けた。私だけ、幼稚園の園庭に取り残されているような気分になった。

お気に入りの玩具を手放さない頑固な子供だ。

諦めの悪さと、何かを信じたい願望が合わさり、私は文学にすがり始めた。私なりの「信仰」である。現代において、文学は高尚であるという風潮があり、なかば権威を持っている。この風潮が私を後押ししたのかも知れない。自分が目指していることが、崇高に思えた。得意である。褒められたから小説家を志したときから、やはり私は成長していなかったのだ。

文学者になるという夢について語ることは楽しいが、いつも翳りがつきまとう。いつか諦めなければいけないのではないか。現実を認めなければいけない時はきっと訪れる。今は若いから夢を見ることを許されているだけ。いつまでも園庭で遊んでいる訳にはいかない。

神戸大学に合格したことは私にとって不幸なことだったのかも知れない。

私が神戸大学に出会ったのは高校一年生の夏だった。他大学のオープンキャンパスがしっくり来なかった私は、なんとなく神戸大学を見学しようと思った。非難を承知で打ち明けると、許可無くキャンパスを見て回った。夏休みであり、コロナ期間だったので、数人とすれ違っただけでほとんど人気は無かったと記憶している。向かう先はもちろん文学部棟である。「神戸大学文学部」の看板の前で写真を撮った私の中に、ひとつの目標が生まれつつあった。ここで学びたい。やはり、理由なんて無かった。どこからともなく入道雲が湧き立つように、心の中で芽生えた憧れは私を覆いつくした。この憧れもまた、いつかは私を縛り付けるという仄かな予感を感じたが、私は無視した。百年記念館から望む神戸市内と、はるかに浮かんだ入道雲に魅入っていたからである。

受験生の間、模試の志望校欄には「神戸大学文学部」しか書かなかった。他の大学を志望することは自分を裏切るような気分させた。

高校三年生の時に正式にオープンキャンパスに参加し、尊敬する教授にも出会いさらに憧れは強くなったが、それに比例して落ちたときの恐怖心も強まっていく。予感の通り、憧れはどんどん形を変えて私を縛りはじめた。憧れは現在への焦りへと変わり、夢は呪いになった。神戸大学に合格しなければ。脅迫観念がさらに他の大学の選択肢を削いだ。自分を騙して、机に向かい続けた。

アイデンティティは人それぞれだが、私の根源には信じることへの憧れ、理想への憧れがあったように思える。私を支えるものはいつも理想だった。理想に向かって走ることでしか自分を保てなかったのだ。

一年の浪人を経て神戸大学に合格したが、果たしてこれは良いことだったのだろうか。この道しか無いのだと自分をだまし続けた3+1年間、きっと私は成長していない。下手に成功体験を積んでしまったせいで、夢の諦め方を学ぶ機会を失ってしまった。

大学の合格をいろいろな人に褒めていただいた。知り合い牧師にも言われた。「やっぱりずっと自分を信じて目指してた甲斐があったな。」私はびっくりして聞き返すと、「何かを信じ続けるなんてそうそう出来ることじゃ無い。諦めずにやってこれたってことは自分を信じてたってことだ。」ぞっとした。私は自分を信じたことなど一度もないと思っていた。他人の眼からはそう映るのだろうか。神を信じることでできない自分が嫌で、文学なり大学なり信じるに値しそうなものを見いだして「信仰ごっこ」をしていただけだ。しかも、信じるのは最初だけで、すぐにそれに固執し、自分を縛り付ける。やっぱり私に何かを信じる才能なんて無かったはずだ。その私が、自分を信じていた？

大学生になって四ヶ月が過ぎようとしてい

る。文学部には私のように何かにとりつかれた人間が多い。話を聞いてみると、私と同様に、鳥の刷り込みみたいに夢を抱き始めた人がたくさん居る。気がついたら目指していた、そんな夢の見方がここでは普通だ。私は夢を抱くのが下手なんだろう。一度こうと決めたら譲らない頑固さはあるが、夢を手放す勇気は無い。こんな性格が嫌いではようがないが、なんとか付き合っていこうと今は思っている。

正直に言えば、夢を諦める怖さには未だに苛まれている。大学生の四年間の間に、小説家以外の夢の見方を見つけられればいいなと思う。それまでは肩肘張らずに文学について学んでみよう。自分を信じて。

新人賞

私と言葉と人と

気が付いたら文学部にいた。

坂道の岩が斜面に沿って転がっていくように。川が海へと流れていくように。それでいて、敷かれたレールの上を走っていくようではない。そんな感覚だった。

けれども、その岩がいつ転がり始めたのか、その川がどこから流れ始めたのか、それは分からない。

幼少期から歴史漫画を読んで育った！——という事実はない。趣味は読書！——と自己紹介カードに書くことができていたのは小学生の時のお話。英語の授業は——無。そんな自分がなぜ文学部という引力に引かれたのか、自分でも分からない。でも、無難な高校を、家から近いという理由で親から勧められたときのあの感覚はなかった。その要因を、ちょっとだけお気に入りだったおもちゃの指輪を探すくらいの気分で、掘り下げてみる。

言葉が好き、とか言葉に興味がある、という気持ちはいつからか漠然と、でも確実に持っていたと思う。教科書の上の1000年以上前に書かれた文章を読むと、当時の人々も今と変わらず働いて、恋して、涙して、花を美しいと思い、夏は夜が良いと思いながら生きていた日常を覗くことができた。音楽とそこに乗った詞を聞くだけで、春の香りがしたり、あの時の悔しさが蘇ったりした。たった17文字を眺めるだけで、作者の見た情景が目の前に現れた。紙の上の文字という記号の羅列を追うだけで、探偵として謎を解くことになったり、暗闇からの刺客を恐れて鼓動を速めたり、ナイフに刺されたところが痛んだり、叶わぬ夢に涙したり、明らかになった事実に息を飲んだりした。そんな、言葉が持

つつい
筒井 はな（文学部1回生）

つ意味伝達能力以上の能力にずっと惹かれていた。少なくとも、小学生のときに図書委員として「ページを開いて本の世界へ（原文ママでない）」みたいなキャッチフレーズを考案して見事図書室にでかでかと掲示されることになったときから。突き詰めれば単なる線の組み合わせにすぎない文字や、単なる発声によって別世界を体験できるという点で、ある意味私は、本のことが、文学のことが、言葉のことが、不思議に思えたのだ。それは今も同じで。

でも、いや、さらに、それ以上に人に興味がある。人のことを知りたい。人が好きだ。そう思う。人に興味がある、なんて何だか地球に来たばかりの宇宙人みたいな物言いになってしまったが、未知に溢れたこの世界に生きているという意味では、この地球上の全員、宇宙人なのかもしれない。実際に自分以外の他人なんて「他者」なのだから。親友に「絶対に誰にも言わないで」と打ち明けたゴシップを口に出さか出さないかを選択するのは親友であって、自分が彼の口を塞ぐことはできない。家族が「自分は犬派だ」と言っていたとして、実際に犬派か猫派かなんて一生分からない。そんな関係の他者。こんな自分以外自分でない世界で過ごしているのは、地球出身であるという共通点をもっている。もしかしたらとてもすごいことなのかもしれない。そして、人がいるところには必ず言葉があり、言葉があるところには必ず人がいる。バベルの塔の建設を阻止するために、神は言葉をバラバラにするという手段を選んだのだ。人と言葉の繋がりやの強さは明白である。言葉に、前述したような力を持たせることのできる人間が好きなのだ。そしてそれと同時にその

力を存分に浴びることができる人間が好きなのだ。全く同じ状況でも、発する言葉とニュアンスが全く同じ人はいないし、全く同じ経験をして、紡ぐ言葉が一語一句同じ人はいない。全く同じ文章を読んでも、一人一人が感じる痛みはすべて違うし、全く同じ歌詞を聴いても一人一人の目の前に流れる情景はすべて違う。各々の人生に裏打ちされて紡がれた十人十色な言葉と、十人十色な感受性が好きだ。

「みんなちがって、みんないい。」金子みすゞ氏による詩『私と小鳥と鈴と』の中のこの有名なくらしい有名な一文は、有名という光に強く照らされすぎて、自分の中でその意味に影が落ちていた。けれど、人生で初めて手に取ったこの詩に紡がれたこの言葉は、私が人に興味がある理由を、そしてこの世界が平和になるために胸に留めておくべきことを、確実に示していたのだ。

ところで、わたしはこの「みんなちがって、みんないい。」というごく簡潔な一文の解釈に迷っていたことがある。「みんなちがう『から』みんないい」のか「みんなちがう『それはそうとして』みんないい」のか。前者は「みんなちがう」ことを条件として初めて「みんないい」と言うことができると述べる一方、後者は、「みんなちがう」という事実と「みんないい」という事実の間に特別な因果関係を見出していない、というような具合だ。中学生くらいの私は一時期このことにしばらく悩んでいたのだが、詩全体を読んだときの印象などから、当時の私は結局後者の解釈であるという結論に至った。そして、今の私も同意見である。むしろ、「多様性の時代」とか言われている今でこそ、後者の解釈であるべきだ、前者の解釈であってはならない、とさえ思う。そもそも「多様性の時代」というのは近年を指示しているのかもしれないが、それ以前の時代にいわゆるマイノリティの人々が存在しなかったわけではなく、近年になっ

てマイノリティの人々が急増したわけもないのだ。正確に言うなら、マイノリティの人々を示す言葉が普及し、その言葉が世間に浸透し始めた「言葉の多様性の時代」でもあるかもしれない。世界へのラベル付けという言葉の力の強さをひしひしとを感じる、という感想は置いておいて、この地球はダーウィンがガラパゴス諸島を訪れるよりずっと前から多様性の星なのである。多様性を認める、認めない、ではなく、無条件に存在するのだ。マジョリティでもマイノリティでも、俯瞰すれば多様性の一部かもしれないその人の色は、当人にとっては唯一無二の自分の色なのである。登校班の女子のランドセルの色が、自分は赤、自分以外は全員水色で肩身が狭かったあの頃の自分に、好きな色はピンクだと言えなかったあの頃の自分に、手を差し伸べるためにも、「みんなちがう『それはそうとして』みんないい」という解釈を抱きしめていたい。

そして、人を知りたいといったときの「人」の中には自分も含まれている。好きな色、好きな食べ物、趣味、特技、将来の夢……ほぼ毎年自己紹介カードに書かされる典型的な質問。こんな簡単な質問ですら、年々書けなくなっていった。イチゴが好きだったのは自分の本心？それとも周りのイメージに合わせているだけ？特技がピアノ、将来の夢がパティシエなんてもう書けない。他人と現実揉まれて自分が分からなくなってしまった。私の思考の根っこの近くには常に自己嫌悪という小さな川が流れている。そんな気がする。別に困難な人生を送ってきたわけじゃない。ガチャガチャで六分の一の外れを引いたり、傘がないに雨が降って傘がある日に雨が降らない。そんな程度だ。この自己嫌悪はネガティブとも違って自分の行動それ相応の気持ちだと思っている。努力が苦手な才能もないのに怒られて傷つくことを極度に恐れている。空っぽの周りをプライドという無駄に高

くて脆弱な壁が囲んでいる。そのせいで生き辛いのだと気づいたのは何歳の頃だっただろうか。メールは一旦未読スルー、電話はできるだけしない、他人と話したくないがために外出しない、そのくらい人が苦手なものそのせいだろう。でも、人が好きなのだ。自分のことは世界の誰よりも嫌いだけれど、世界の誰よりも認めていると思う。昔の、現実を今より知らなかった自分も、今の矛盾だらけの自分も、全てまとめて自分だと、認めている。悲観的だけど楽観的。怠惰だけど完璧主義。現実主義だけど理想主義。衝動的だけど計画的。感情は出にくいけどすぐ笑っちゃう。自己開示は苦手だけど自分の話を聞いてほしい。パン派だしご飯派。人間は皆矛盾を抱えた生き物だけれど、私の場合両者の距離が近すぎて、発現がランダムで、自分でも自分が掴めない。そして選択を迫られると「どっちでもいい」と言ってしまうのだが、これは思考を放棄したのではなく思考を巡らせに巡らせた結果パン：ご飯＝50:50という数字が脳内に表示された上での第三の選択肢だとして受け取ってほしい。

そして、私の人生最大の矛盾は不器用で怠惰なのに音楽をやっていることであると思う。「音楽をやる」と言っただけで驚くまでもいかない程度かもしれないが、10年以上前にピアノを習い始めた時から現在まで曲がりなりにも何かしらの楽器と向き合っているのだ。正直理由は分からない。音楽が好きなことに嘘はないが、この「好き」は「スイーツが好き」と言うときの「好き」とあまり差異はない気がする。それでも、音楽がなかったら少なくとも精神的に生きていけなかったと思うし、高校での吹奏楽部での経験は私の中の無駄に高かった壁を少し壊してくれた。やっぱりその経験には人がいて、人は苦手なつもりだったけれど好きでもあるんだと思い知らされた。

音楽、アイドル、スイーツ、ジャンクフード、

そして、文学。これらの私が好きなものは生存のためには無駄であるかもしれない。でもこれらのコンテンツが普通に世界に溢れているのは、無駄ではないからだ。ここまで色々なことを書き連ねてきたが、私が文学部にたどり着いた理由、それは誰のためでもなく、自分が、言葉を、人を、自分を、知りたいからだ。知るきっかけの切れ端を掴みたいからだ。文学は、文学部は、AIに乗っ取られることはないという自信があるからだ。だってAIはステージで本領が発揮できなくて悔しい思いをしたことも、自分の列挙多めな文章を反省したことも、言葉の代わりに涙が零れたこともないのだから。

自分以外の全員にとって無駄だとしても、私は今日も六甲第2キャンパスの隅っこで、私のために学ぶ。

学生レポートコンクール入賞作品 [講評]

優秀賞 「逆張りの終着点」 有川 悠真 (社会学4回生)

人生の岐路では周囲とは迎合しない頑なな筆者。但し、一度目標を定めると達成するため企画力と行動力を発揮する。社会に出ると、まだまだ“No!”と言えない日本人が多いような気がする。いい意味での逆張りが試されるのはこれからだ。卒業後が本番、大いに力を発揮してほしい。

佳 作 「2025年1月17日の日記」 熊谷 孝太 (社会学2回生)

東日本大震災を5歳で経験した筆者は、今、阪神淡路大震災の取材を通して悩み、考える。気負わない姿勢に、筆者の柔らかい感性が感じられる。プラスにもマイナスにも大きな力を持つメディア、そのあり方は、災害時の取材・報道に限らず重要な問題点だと思われる。

佳 作 「記憶の歩き方」 村上 陽向 (社会動態 M1)

筆者は谷川俊太郎の詩と、村上春樹の紀行文を手に、そこに書かれた街を歩きながら想像を巡らす。自分が暮らす神戸の街も、その一部を忘れてしまうと、その「神戸」は存在しなくなるのではと考え、「記憶を歩き、記すこと」にトライした。面白い発想だ。文末の我が町の記述は、地図や情景が浮かび上がってくる。

佳 作 「『ガクチカ』をこえて」 末廣 晃 (地理学3回生)

今の大学生は、履歴書の中での自己の商品価値を上げるため、大学での経験を取捨選択し、狭めているのではと筆者は論じる。求められる人材は、ビジネス拡大や新たな技術獲得に邁進、貢献できる人間。効率性や功利性を求めひた走るその社会は、本当に人々が求めるものなのか？「ガクチカ」をこえて問い続けてほしい。

新人賞 「ごっこ遊び」 日下部 友基 (1回生)

新人賞 「私と言葉と人と」 筒井 はな (1回生)

選考を終えて

今回も、人文学を学ぶ意味や葛藤、文学部の存在意義につき深く、しっかり考えた作品が占めました。次回は、文学部生らしい「自由な発想」や「心の遊び」を感じさせてくれるユニークな作品にも出会いたい。

(文責 審査委員長 西川京子)

2026年の第20回 文窓賞 学生レポートコンクールへの
作品応募を心待ちにしております。 文窓会一同

発行

2025年10月30日
神戸大学文学部同窓会
文窓会



<https://www.bunsokai.com/>（文窓会）
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/>（神戸大学文学部）